

思考力・判断力・表現力をはぐくむための学習指導の工夫

～「論述」と「議論」する言語活動を通して～



那覇市立首里中学校教諭

西原 卓

目次

I	テーマ設定理由	25
II	研究目標	25
III	研究仮説	26
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	26
V	研究内容	26
1	思考力・判断力・表現力について	
2	言語活動について	
(1)	言語活動の必要性	
(2)	公民的分野における言語活動	
(3)	指導計画の視点	
3	「論述する活動」について	
(1)	論述するための発問	
(2)	論述形式	
4	「議論する活動」について	
(1)	学習の効果	
(2)	議論する活動の形態，方法	
VI	授業実践	30
1	単元名	
2	単元目標	
3	単元について	
(1)	教材観	
(2)	生徒観	
(3)	指導観	
(4)	関連する言語活動	
4	指導計画	
5	本時の学習	
(1)	目標	
(2)	授業仮説	
(3)	準備	
(4)	展開	
(5)	評価	
VII	結果と考察	34
VIII	研究の成果と課題	36
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献と資料》

思考力・判断力・表現力をはぐくむための学習指導の工夫

～「論述」と「議論」する言語活動を通して～

那覇市立首里中学校教諭 西原 卓

I テーマ設定の理由

現代社会は、家族形態の多様化や新しい知識・情報・技術が、あらゆる分野で重要性を増すなど、私たちをとりまく社会生活は大きく変化している。また国際社会のグローバル化は、国際競争や多文化社会を加速させる一方、国際協力や異なる国・文化と共存・共生する社会（共生社会）の必要性を増大させている。このような時代である今こそ、基礎的知識を培い、国際社会に興味を持ち、自らあらゆる分野に参画していく資質や能力を育成することが大切になる。

そのため、中央教育審議会答申においては、社会科改善の基本方針の中で「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させる」ことを一層重視した。また思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむためには、各教科における「言語活動の充実」が不可欠であると示した。さらに公民的分野について、改善の具体的事項の中で「諸事象の意義を解釈させたり事象間の関連を説明させること、自分の考えを論述させたり、議論などをとおしてお互いの考えを深めさせたりすることを重視する」と示した。

以上のことから、これからの授業には、児童生徒が、多様な資料を活用して課題を多面的・多角的に捉え、推論、解釈し、自己の考えを深め、表現する力を育てることが求められている。

これらのことを踏まえ、日々の教材研究や授業実践を行っているところである。前年度は特に、歴史的分野において視覚教材（資料）を活用した指導方法の工夫・改善を行った。その結果、前年度1学期終了時に実施したアンケート（中学2年4クラス）では、「社会科の授業は楽しいか」「授業の内容が理解できたか」という問いに対し、どちらの問いでも8割程度の生徒が、「楽しい」「理解できた」と肯定的に答えており、興味・関心を高めることや基礎的な知識の定着に関して、一定の成果が見られた。しかし生徒の実態をみると、社会的事象を多面的・多角的に捉え、自己の考えを深め、表現できる生徒は多くなかった。これらの力をはぐくむためには、資料を活用して「わかったこと」を書くだけでなく、「おもったこと」「考えたこと」を「論述」したり、「議論」したりするなどの言語活動が必要であると考えた。

そこで、「論述する活動」を重点的に取り入れ、学習形態を工夫した「議論する活動」を行うことで、思考力・判断力・表現力がはぐくまれると考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

思考力・判断力・表現力をはぐくむために、「論述」と「議論」する言語活動を取り入れた学習指導の工夫を研究する。

Ⅲ 研究仮説

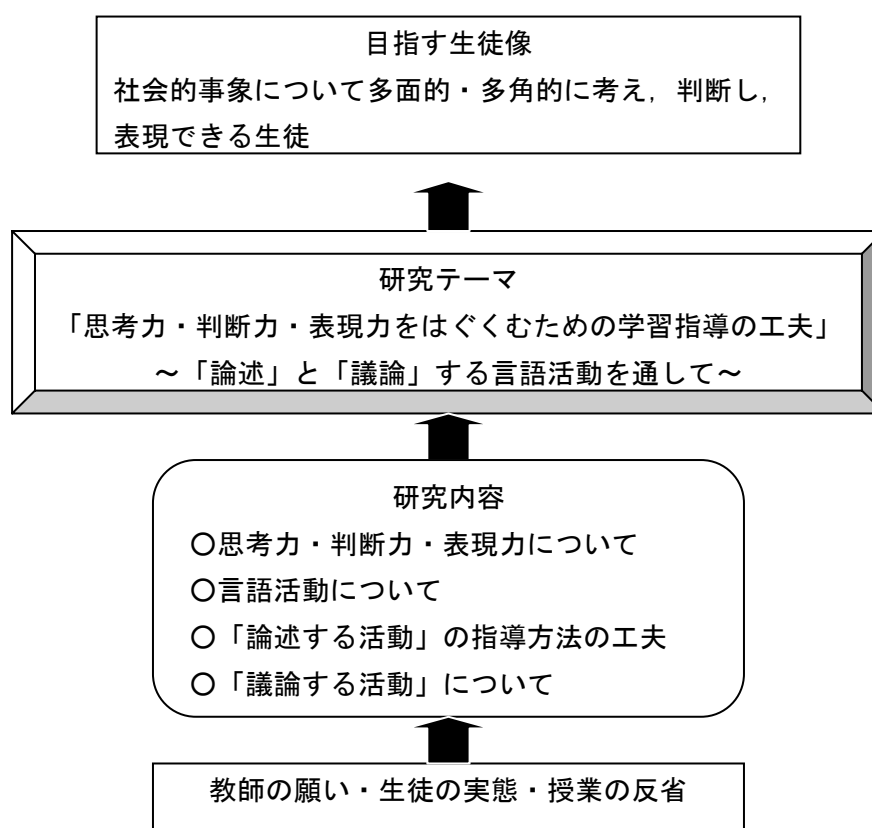
1 基本仮説

公民的分野における言語活動として、「論述する活動」を重点的に取り入れ、学習形態を工夫した「議論する活動」を行うことで、社会的事象に対する思考力・判断力・表現力がはぐくまれるであろう。

2 作業仮説

- (1) 公民的分野において、社会的事象について「論述する活動」を重点的に取り入れることで、多面的・多角的に考察し判断する力が育つであろう。
- (2) 公民的分野において、社会的事象について「議論する活動」を行うとき、学習形態を工夫することで、これまでの学習成果が活用され、表現する力が育つであろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 思考力・判断力・表現力について

新学習指導要領では、その目標の中で「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」と示し、また各分野の目標に共通して「多面的・多角的に考察し公正に判断する」「適切に表現する」と示している。さらに指導に際して「小学校社会科の内容との関連及び各分野相互の有機的な関連を図るとともに、地理的分野及び歴史的分野の基礎の上に公民的分野の学習を展開する」と示している。

社会科において育成することが求められる「思考力・判断力・表現力」について、小原友行(2009)は概念的規定を行い、次の5つの力を指摘している。

- ①「問題発見力」…具体的な活動や体験を通して取り上げられた教材に働きかけることによって「社会を知る」「社会がわかる」「社会に生きる」ための問題を発見することができる力（学習に対する関心・意欲・態度）
- ②「資料活用の技能」…「社会を知る」ための問題「どのように、どのような」を解決していくことができる力（問題を解決するために必要な情報を収集し読み取る力）
- ③「思考力」…「社会がわかる」ための問題「なぜ、どうして」を解決していくことができる力
- ④「判断力」…「社会に生きる」ための問題「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいか」を解決していくことができる力
- ⑤「表現力」…解決した情報を発信していくことができる力

現代社会の課題を地理的・歴史的関連性を踏まえて理解し、「社会がわかり」「これからの社会に生きる」力を育てるために、これらの5つの力の中から「思考力・判断力・表現力」の育成に視点を当て、研究を進めていきたいと考える。

2 言語活動について

(1) 言語活動の必要性

人間は考える時、自己の中で言語を使う。その結果を他者へ伝える時、「文章化する」「説明する」などの表現する言語活動が行われる。つまり思考・判断・表現する時、常に「言語」と「言語活動」が関わってくる。そのため、思考力・判断力・表現力をはぐくむためには、言語の能力を高める必要があり、言語活動の充実が重要となる。

そこで本研究では、学習活動における言語活動を工夫することで、思考力・判断力・表現力の育成を図りたいと考える。

中央教育審議会答申は、「レポートの作成や論述といった知識・技能を活用する学習活動を各教科で行い、言語の能力を高める必要がある」と述べ、その能力の育成のためには、右のような言語活動が重要であると示した。

- ①体験から感じ取ったことを表現する。
- ②事実を正確に理解し伝達する。
- ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- ④情報を分析・評価し、論述する。
- ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- ⑥お互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

(2) 公民的分野における言語活動

公民的分野の学習においては、上記①～⑥と関連してどのような言語活動が重要になるか。新学習指導要領は各分野の内容の取り扱いの中で、それぞれ以下のように示している。

地理的分野	歴史的分野	公民的分野
資料を的確に読み取ったり、地図を有効に活用して事象を説明したり…(中略)…また、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換するなどの学習活動を充実させること。	歴史的な事象の意味・意義や特色、事象間の関連を説明したり、課題を設けて追求したり、意見交換したりするなどの学習を重視して、思考力、判断力、表現力を養うとともに…(中略)…確かな理解の定着を図ること。	分野全体を通して、習得した知識を活用して、社会的な事象について考えたことを説明させたり、自分の意見をまとめさせたりする…(中略)…考えさせる場合には、資料を読み取らせて解釈させたり、議論などを行って考えを深めさせたりする。

また中央教育審議会答申は公民的分野の改善の具体的事項の中で「習得した概念を活用して諸事象の意義を解釈させたり事象間の関連を説明させること、自分の考えを論述させ

たり、議論などを通してお互いの考えを深めさせたりすることを重視する」とも示している。

これらの記述から、公民的分野で特に重視される言語活動について以下のように考える。

言語活動	理由（根拠）	留意点
1 考えを「論述（まとめ、説明）する活動」	○「考え」に特に重点が置かれており、「考え」を論述（まとめ、説明）することが重視されている。	○資料や習得した知識、概念を活用して事象を解釈すること
2 「議論などの活動」	○「議論」という表現は、公民的分野のみに記述がある。 また議論など「話し合うこと」は、民主主義社会の基本的なルールである。そのような基本的なルールを、社会科の授業において体験し、その意義を理解することは、社会科の目標にある「民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質」を育てる上で、必要なことである。	○事象間の関連を図ること ○分野全体を通してこれらの活動を行うこと

(3) 指導計画の視点

「議論」など話し合い活動を成立させるためには、各授業と指導計画をどのように構成するか。市川則文(1997)は、授業を時間の尺度で考えると「50分の最低半分は生徒の持ち時間であること」と述べている。また向山洋一(2003)は、討論の授業を成立させるために「問題への答えをほとんどの子が持っていることが重要な条件であり、討論する前に意見をノートに書かせることが必要である」と述べている。

そこで本研究では、前述の言語活動「論述（まとめ、説明）する活動」「議論などの活動」を分野全体を通して行うために、単元の指導計画について以下のように考える。

指導過程	言語活動	ねらい	留意点	理由（根拠）
単元の始め	考えを「論述する活動」	○様々な事象について考え、解釈する。	○授業形態は「一斉授業」の形態とする。 ○一斉授業において取り扱う内容を精選する。 ○各授業では、その内容を学習する過程で、生徒の活動（考える・まとめる・説明する）場面を設定する。	○課題となる事象を多面的・多角的に捉えるためには、関連する様々な事象についても「自ら」考え、解釈する必要がある。また多様な考えに触れることができる。 ○生徒の活動時間(50分の授業の最低半分)を保障する。 ○討論する前に自分の意見を書いていることが必要である。また説明することで表現することに慣れ、意見交流も期待できる。
単元の中	考えを「論述する活動」	○事象間の関連を図り、課題となる事象を多面的・多角的に捉える。	○前時までの論述を活用して記述する、「テスト」形式にする。 ○テストは、次時の「議論する活動」に、そのまま活用できる形式にする。	○ほとんどの生徒に課題への考えをしっかりと持たせる。 ○「議論する活動」の準備に時間をかけずに、「議論する活動」を無理なく年間指導計画に位置づける。

単 元 の 終 わ り	「議論 などの 活動」	○自らの考えや 集団の考えを発 展させ、表現力 をはぐくむ。	○「単元の始め・中」の過程にお ける学習成果が活用できるような 議論の形式で行う。	○意見交流の場において、これまでに 「論述したこと」を述べ合うことによ って、思考力・判断力が深まり、表現力 をはぐくむ。
----------------------------	-------------------	---	---	--

3 「論述する活動」について

(1) 論述するための発問

50 分の各授業の中で、生徒が思考・判断するためには、考えさせるための発問が必要である。その発問は、具体的であり、生徒が追求意欲を持つものでなければならない。そのため発問の工夫・精選が必要であり、市川則文(1997)は発問を考える視点を、

- ①生徒が具体的に多様な答えが予想できる、いわゆる「具体的なもの」
- ②授業中の事前の学習活動とつながっている、いわゆる「関連性があること」
- ③その発問を考えることで新たな事象が見えてくる、いわゆる「発展性のあるもの」と述べている。

これらを参考に、本研究では特に、「生徒が授業の中で習得した知識・概念を活用して、現在の社会的事象を具体的に捉えることができる」という視点で発問を工夫する。

また発問の形式として、「AかBか」という形式にすることで「2つの立場」を創り出し、「なぜそれを選んだか」その理由を論述する方法をとる。その理由を説明する活動の過程で、「違う立場」間での意見交流が行われ、お互いの思考が刺激されることで、「新たな考えや事象が見えてくる」ことも期待できると考える。

(2) 論述形式

より多くの生徒が論理的に思考・判断するためには「…だから…と考える」「…だから…が望ましい」など、自分が考え・判断したことの根拠を論述することが有効であると考ええる。ここでは有田正和(1995)を参考に、ワークシートを活用し、以下に示した形式で論述する方法を取り入れた。

- ①「…（という資料）に」
- ②「…と書かれている（とある）から」
- ③「…と考える（思う）。だからAまたはBが正しい。」

4 「議論する活動」について

(1) 学習の効果

議論とは、「お互いに自分の説を述べあい、論じあうこと。意見を戦わせること」とある(広辞苑)。学習活動としては、話し合い活動や討議・討論活動などが考えられる。

新学習指導要領解説編では、「議論などを通して互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させることなどを通して思考力・判断力・表現力の育成を図る」と示している。このことを踏まえ、web 資料等を参考に、議論する活動の学習効果を以下のように考える。

- ①生徒主体の活動であるため、学習意欲の高まりが期待できる。
- ②それぞれの持つ知識、考えなどがお互いに刺激し合い、思考力・判断力・表現力・問題解決力などの高まりが期待できる。
- ③活動を通し自分の考えを整理することができ、事象に対する理解の深まりが期待できる。

(2) 議論する活動の形態，方法

本研究では特に，上記②の学習効果を上げることがねらいであるが，話し合い活動や討議・討論活動に慣れていない生徒が議論する時，学習効果を上げるためには，議論を行うための準備(立論・質問の作成など)や形態・方法の工夫が必要となる。しかし分野全体を通してこのような活動を行うために，その準備に特別多くの時間をかけることは，年間指導計画上現実的でない。

そこで本研究では，次のことに視点を置いて，議論の形態と方法を工夫する。

①前時のテストで自ら選んだ立場ごとにグループを形成する。

②立場間で議論を行う。

それによって，これまでに「論述したこと」がそのまま活用され，「議論する活動」の準備に時間をかけることなく，位置づけることができる。また立場内(グループ内)または立場間(グループ間)での話し合いによって，思考が深まり，表現力がはぐくまれる。

VI 授業実践 (第3学年)

1 単元名 「平和主義とこれからの日本の安全保障」

～国際社会・基地問題・自衛隊の活動を通して～

2 単元目標

- (1) 領土問題や国際問題から，国家間の相互の取り組みや国際連合の役割を理解し，国家の主権とアジアを中心とした国際情勢について考えることができる。
- (2) 基地問題や自衛隊の活動・国際貢献について理解し，平和主義と我が国の安全保障について考えることができる。

3 単元について

(1) 教材観

本教材は，教科書の内容を再構成して単元化したものである。教材化する視点として次の5点を重視した。

本教材は沖縄戦を経験し，現在も多くの米軍基地を抱える本県の歴史的・地理的特性から，避けては通れない問題であると考え。

- | |
|------------------------------------|
| ①学習指導要領の目標や内容，内容の取り扱いに迫れるもの |
| ②単元全体を通して生徒が意欲的に考え追求できるもの(時事的事象など) |
| ③地域社会や生徒の生活にかかわりがあり，社会生活を実感できるもの |
| ④年間指導計画を踏まえたもの |
| ⑤地理的分野・歴史的分野の既習内容が活用できるもの |

また現在日本が抱える国家間の問題には，北方領土を初めとする領土問題，北朝鮮問題など，未解決問題は少なくない。さらに日本の国際貢献に関しては，インド洋での給油活動，ソマリア沖での自衛隊の活動など，国民世論の分かれる問題などもある。

本教材は，生徒がニュースなどで見聞きしている，このような時事的事象と地域の歴史的・地理的特性を関連づけて教材化したものである。そのため生徒が現代社会における課題を実感し，意欲的に考え，追求していくことができる教材だと考える。

(2) 生徒観

事前アンケートから「社会の出来事に関心がある」という問いに対して約60%，また「社会の出来事に関して考えることは楽しい」という問いには，約70%の生徒が肯定的に答えている。しかし「考えを発表することは楽しい」に肯定的に答えた生徒は，40%程度と多

くない。さらに実際に「考えを発表できる」「考えを伝えあう・討論することができる」という問いには、70%の生徒が否定的に捉えている。

そこで、社会的事象について考える活動を重点的に取り入れることで、事象に関する解釈を深め、さらに討論活動の形態・方法を工夫することで、活発な意見交流や討論を行い、思考力・判断力・表現力をはぐくんでいきたい。

(3) 指導観

課題となる社会的事象を多面的・多角的に捉えるため、単元の前段階(4/6 時間)の各授業において、教師側の「A か B か」という発問を通して、社会的事象を意図的に二つの側面から捉えさせ、選んだ理由を論述する言語活動を重点的に取り入れる。

さらに社会的事象を多面的・多角的に捉えるためには、事象間の関連を図る必要あるが、本単元では、その活動を「議論する活動」に活用できるようなテスト形式で行う。(5/6)。

また単元の最後(6/6)に、前時のテストで生徒自らが選んだ立場で討論する、「立場討論」を取り入れる。活動形態としては「バズセッション」の側面(グループの形成、グループごとの話し合い)を取り入れ、また方法としては「ディベート」の手法(作戦タイム・質疑応答)の一部を取り入れた討論活動を行う。それによって、これまでの学習成果が活用された討論が行われ、より表現力がはぐくまれるであろうと考える。

活動の種類	方法・特徴
①バズセッション (グループ討議)	4～6人程度の小グループに分かれ、グループごとに話し合いをした後、各グループの結論を発表し合い、全員で討議する方法
②ディベート	あるテーマに対して、賛成(肯定側)と反対(否定側)の2組に分かれて論戦する方法。論理の展開、質問の仕方、反論の仕方などを競い合い、最後に審判を下す。

(4) 関連する言語活動

①情報を分析・評価し、論述する。

②お互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

4 指導計画(6 時間)

時	目 標	主な学習内容と活動	指導上の留意点	言語活動と評価
1	・9条の内容と自衛隊の活動を理解し、 憲法9条について考える。	・自衛隊の装備について把握する。 ・前文と憲法9条について理解する。 ・具体的事例を通して、憲法9条について考える。(発問①・②・③について、自分の考えを論述・発表する。)	・提示資料の工夫 ・発問の工夫	① 思考・判断
2	・国際社会の成り立ちについて理解し、 国家の主権と国家間の問題について、考える。	・国際社会の成り立ちについて理解する。 ・北方領土問題について理解する。 ・北方領土問題を通して、国家の主権と国家間の問題を考える。(発問①・②について、自分の考えを論述・発表する。)	・提示資料の工夫 ・発問の工夫	① 思考・判断
3	・安保条約と基地問題を理解し、在日米軍について考える。	・在沖米軍基地について把握する。 ・尖閣諸島問題を通して、安保条約について考え、理解する。(発問①・②について、自分の考えを論述・発表する。)	・提示資料の工夫 ・発問の工夫	① 思考・判断

		る。)		
4	・北朝鮮問題から、 国連の活動を理解 し、アジアを中心と した世界情勢を考 える。	・北朝鮮の概要について把握する。 ・国連(安保理)の活動について理解する。 ・北朝鮮問題を通して世界情勢を考える。(発問①につ いて、自分の考えを論述・発表する。)	・提示資料の 工夫 ・発問の工夫	① 思考・判断
5	これまでの学習を 活用し、事象間の関 連を図り、事象を多 面的・多角的に考え る。	・それぞれの立場を選んだ理由を、既習学習を活用して 論述する。 ・事象間の関連を図り、課題となる事象を多面的・多角 的に捉える。	・テスト形式。 ・事象間の関 連が図れるよ うに支援す る。	① 思考・判断
6 本 時	・平和主義とこれか らの日本の安全保 障について考える。 ・討論活動を通して 考えたことを表現 する。	・学習方法・学習形態の確認 ・立場討論	・活動がスム ーズにいくよ うに支援す る。	①・② 思考・判断 表現

5 本時の学習

(1) 目標

- ①これまでの学習成果を活用して、平和主義とこれからの日本の安全保障について考えることができる。
- ②討論活動の中で、考えたことを表現することができる。

(2) 授業仮説

- ①グループでの話し合いの中で、これまでの学習成果を活用し、さらに他のグループと意見交流を行うことによって、課題についての考えが深まるであろう。
- ②討論活動において、討論の形態と方法を工夫することによって、グループ内または他のグループとの意見交流が行われ、表現力がはぐくまれるであろう。

(3) 準備：ワークシート、配付資料、フラッシュカード

(4) 本時の展開

	学習内容と活動	指導上の支援(☆)と留意点(◇)	評価
導 入	1 今日の学習活動の確認と座席作り (1)学習のねらいと流れ (2)6 つの立場と前時 に選んだ立場に立った討論であることの確認	☆確認事項は、板書やフラッ シュカードを提示しながら 説明する。	
①自衛隊違憲派 ○A：自衛隊は憲法 9 条違反。さらに安保条約も破棄して、日本は完全に軍事力を持たない。 ●B：自衛隊は憲法 9 条違反。そこで安保条約のもと、アメリカに完全に守ってもらう。 ②自衛隊合憲派 ○C：憲法 9 条と自衛隊の関係は今の状態のまま。ただし安保条約は破棄。米軍基地を追い出す。 ●D：憲法 9 条と自衛隊の関係は今のまま。米軍基地も今の状態のまま。つまり現状維持。 ③9 条改憲派 ○E：憲法 9 条を改憲し、軍隊と規定する。ただし安保破棄。日本の防衛に関しては、日本の力だけで完全を目指す。 ●F：憲法 9 条を改憲し自衛隊を軍隊と規定する。しかし日本の防衛に関しては、これまで通りアメリカと協力する。			

10分	(3) 前時に生徒が選んだ立場は4つ (A・B・C・D)。4つの立場に分ける。 (4) 座席作り (立場ごとに座る) (5) 立場内のグループ作り	◇ (○は日米安保条約反対派, ●は日米安保条約賛成派) ◇ 立場内の人数が多い場合, 数グループ形成する。 仮説2: 討論形態の工夫	
展開 32分	2 立場討論 論題「憲法9条とこれからの日本の安全保障」 ①自衛隊違憲派 (A・B) ②自衛隊合憲派 (C・D) (1) グループ内での立論の作成 (10分) - 一人の意見だけを書かない。・全員の意見を入れる。 - 箇条書きでもよい。 (2) ①-A・B (グループごと) の立論 (4分) ・予想される発言 	☆質問の仕方や、聞くときのマナーなども確認する。 ☆立論の作成には、前時のテストを活用させる。 仮説1: 学習成果の活用 ◇個人の考えだけでなく、各自の考えを取り入れた立論を作成させる。	・思考・判断 ・表現
	①-A: コスタリカのような国を手本に、日本も全く戦力を持たない。 ①-B: 自衛隊は憲法9条の「戦力」になり憲法違反。そのため、アメリカに守ってもらう。		
	・他のグループはキーワードをメモする。 (3) 作戦タイム (3分) - A・Bは予想される質問とその回答を考える。 - C・DはA・Bに対する質問の選択・作成 (4) 質疑応答 (4分) ・予想される質問	仮説2: 討論方法の工夫 ☆質問の選択・作成には前時のテストを活用させる。 ☆質問しないグループへは質問を促す。	・思考・判断 ・表現
	①に対して ・外国が攻めていたらどうするのか? ・自分たちで守らないで、アメリカに守ってもらうのは虫がよすぎる。		
	・質問に対する回答 (5) ②-C・D (グループごとの立論) (4分) ※(2)～(4)の繰り返し 	仮説1: 他のグループとの意見交流 ☆質問への回答が出ない場合、時間を与える。(1分以内)	
終末 10分	3 各立場の立論や質問を聞いて、自分の立場に変化があったかを確認する。 4 今日の授業のまとめ 5 自己評価を行う。	◇挙手による確認 ◇ワークシートをしっかりとめさせる。	

(5) 評価

○立論、作戦タイム、質疑応答の場面で、グループ内で考えることができたか。(思考・判断)

○グループ内で話し合う場面で、自分の意見を言うことができたか。(表現)

○他のグループとの意見交流(質疑応答)の場面で、発言することができたか。(表現)

VII 結果と考察

【検証 1】

公民的分野において、社会的事象について「論述する活動」を重点的に取り入れることで、多面的・多角的に考察し判断する力が育つであろう。

【結果】

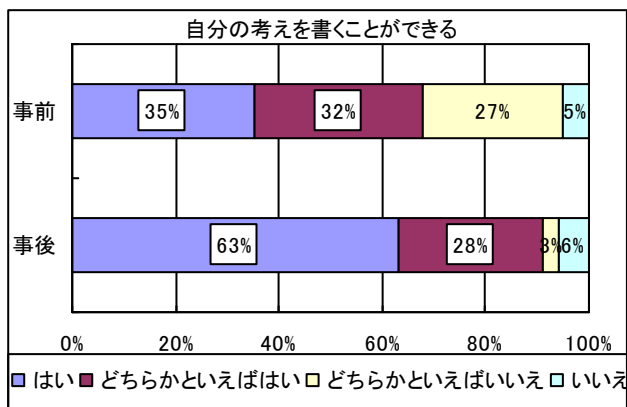
資料 1 の学習前のアンケートでは、「論述する活動において、自分の考えを書くことができる」生徒は、67%(はい、どちらかといえばはい)であったが、学習後は 91%に増加した(24%増加)。

資料 2 の学習前のアンケートでは、「社会的事象について考えることは楽しい」と感じている生徒は、76%(はい、どちらかといえばはい)であったが、学習後は 84%と増加した(特に「はい」と答えた生徒は 21%増加)。

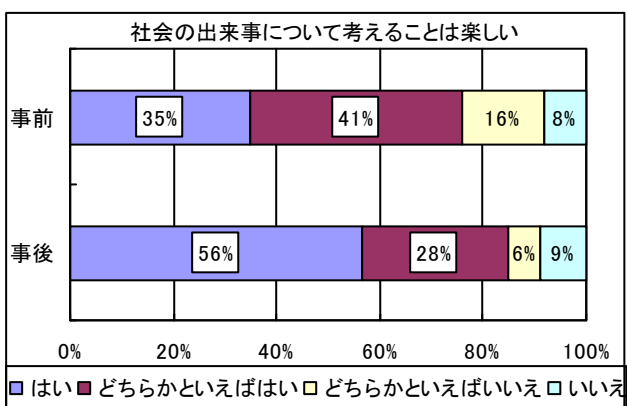
資料 3 の学習前のアンケートでは「社会科の授業で社会的事象について考える力がつく」と考えている生徒は、68%(はい、どちらかといえばはい)から、学習後は 82%と増加している。

資料 4 は単元の 5 時間目に行った「課題となる事象を多面的・多角的に考察・判断したことを論述するテスト」である。

資料 1 論述する活動についてのアンケート



資料 2 思考力についてのアンケート①

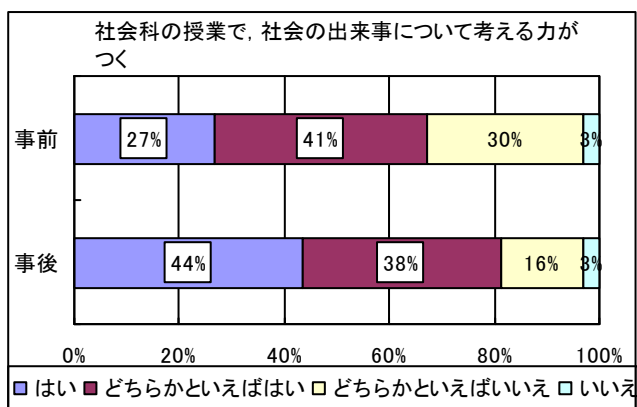


【考察】

社会的事象を多面的・多角的に考えるためには、関連する各事象について考え、それを論述(書く・説明する)することが必要である。本単元(6時間)では、各授業(5時間)において、「考えを書く活動」を重点的に授業の中に取り入れた。それによって、自分の考えを書くことに積極的に取り組んでいる生徒の姿勢が、資料 1 の結果から見られる。

また資料 2・3 の結果から、「学習内容と現在の社会的事象を関連して考えさせるための教材と発問」は、社会的事象について考えることの楽しさを実感させ、考える力をはぐくむことに有効であると思われる。

資料 3 思考力についてのアンケート②



資料4は、テストにおいて「自衛隊は憲法9条違反・安保反対・完全非武装」を選んだ生徒の記述内容である。その中の「憲法は軍隊を持たないといっているからここまではOKとかではない」「軍事力を完全に手放したら、基地問題もなくなるし、そこに払っているお金ももっと良いことに使える」などの記述から、それまでの各授業(4時間)で考えたことが活用され、課題となる事象(平和主義と日本の安全保障)について、多面的・多角的に考察し判断していることが見て取れる。

以上のことから、社会的事象について考えたことを「論述する活動」を重点的に取り入れることは、社会的事象を多面的・多角的に考察し判断する力を

はぐくむことにおいて有効であると考えられる。

【検証2】

公民的分野において、社会的事象について「議論する活動」を行うとき、学習形態を工夫することで、これまでの学習成果が活用され、表現する力が育つであろう。

【結果】

資料5の学習前のアンケートでは、「自分の考えを伝えあう・討論することが好き」な生徒は49%(はい、どちらかというとはい)から、学習後は82%と増加した(33%増加、特に「はい」と答えた生徒は44%増加)。

また資料6の学習前のアンケートでは、「自分の考えを伝えあう・討論することができる」生徒は、30%(はい、どちらかといえばはい)から、学習後は78%と増加した(48%増加、特に「はい」と答えた生徒は42%増加)。

資料7・8は、単元の最後に行った討論の授業後の感想である。

資料4 多面的・多角的に考察・判断したことを論述するテスト

I: 今までの学習(それぞれの授業)と関連づけて、選んだ理由を書きなさい。(各3点、計12点)

1: 9条と自衛隊の歴史や活動の授業と関連して

例:「理由は・・・だから」「・・・だから・・・と思う」

自衛隊は、今の日本からしたら、
あまりに軍事力になり、思ってたから。
それに、憲法で軍隊を持たないと言っている
から、この憲法はOKでいい。いっしょに
考えて、その軍事力自体をなくせば、

いいと思う。

軍事力で、何でも解決する
から、間違えてると思うから。

わたしは(①)-(A)
を選んだ(例: (③)-(C))

2: 北方領土と日本の取組の授業と関連して

例:「理由は・・・だから」「・・・だから・・・と思う」

軍事力が強いから、北方領土が
返って来ればいい。この件で、
話し合いで解決すると思ってるから。

3: 安保・基地問題の授業と関連して

例:「理由は・・・だから」「・・・だから・・・と思う」

軍事力を完全に手放したら、基地問
題もなくなる。そこに払っているお金も
もっと良いことに使えると思ってるから。

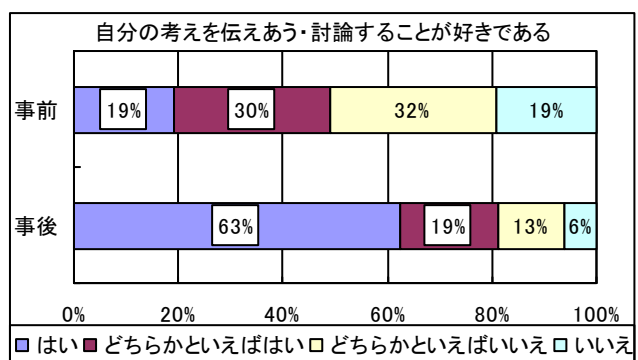
6

4: 国連・北朝鮮問題の授業と関連して

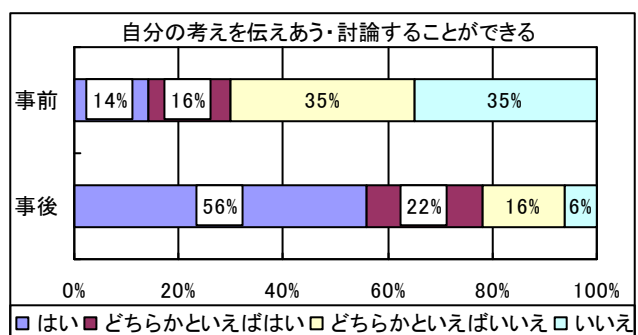
例:「理由は・・・だから」「・・・だから・・・と思う」

何かあっても、国連が守ってくれ
るから、争うための軍事力は
必要ないと思う。

資料5 「議論する活動」についてのアンケート①



資料6 「議論する活動」についてのアンケート②



【考察】

資料5・6の結果から、「これまでの学習を活用して、自ら選んだ立場でグループを形成し、ディベートの手法の一部を取り入れた討論の形態・方法」によって、生徒が討論の楽しさを実感し、積極的に討論活動に取り組んでいることが見られる。また資料7の「このような授業は初めてなので、楽しく授業を受けることができました」という記述からも、生徒が討論活動に楽しさを感じていることがわかる。

資料7の「自分たちで意見を考えることができました」、資料8の「話をする機会として、良かった」という記述からは、グループ内において自分の考えを伝えあうことができたことが見える。さらに、資料8の「他の人の考えも、ちゃんとそれなりの理由があって…違う意見である自分のほうが納得してしまいそうになった」からは、他の人の考えを聞くことで、自分の考えが見つめ直されそうになるなど、思考の揺さぶりも見られる。

以上のことから、討議・討論の形態と方法を工夫した議論する活動は、表現する力をはぐくむことにおいて有効であると考えられる。

資料7 討論後の生徒の感想①

このような授業は初めてなので、楽しく授業を受けることができました。討論することは少し難しかったけど、自分たちで意見を考えることができました。

次はもっと発表ができるようにしたいです。

資料8 討論後の生徒の感想②

今日は、A君とB君が同じ班のメンバーで、普段はめったに話さないから、話をする機会として、良かった。それと、自分では「この意見しかない」と思っていたけど、他の人の考えも、ちゃんとそれなりの理由があって、その意見を聞いていると、違う意見である自分のほうが納得してしまいそうになった。

VIII 研究成果と課題

1 成果

- (1)「論述する活動」を重点的に取り入れることで、それぞれの事象について考え、事象間の関連を図り、課題となる事象を多面的・多角的に思考し判断することができた。
- (2)「議論する活動」を行うとき、これまでの学習成果を活用できるような討論形態と方法を工夫することで、表現する楽しさを感じ、表現しようとする姿が見られた。

2 課題

- (1)「議論する活動」の学習効果をより高めるための指導の工夫
- (2)「論述」と「議論」する活動の年間指導計画への位置づけ

《主な参考文献と資料》

- 『中学校学習指導要領 社会科編』 文部科学省 日本文教出版社 2008年
『「討論の授業で」生徒の人間関係を築く』 法則化中学中央企画室編 明治図書 2001年
『話し合い・討論』で作る中学校社会科の授業』 市川則文著 明治図書 1997年
『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン(中学校編)』 小原友行編著 明治図書 2009年
『教え方のプロ・向山洋一全集 47 発問一つで始まる「指名なし討論」』 向山洋一著 明治図書 2003年
『戦争と平和をめぐる論点・争点と授業づくり』 森分孝治編著 明治図書 2006年
『国際関係と平和をめぐる論点・争点と授業づくり』 西脇 保幸編著 明治図書 2006年
『中学校思考力・判断力-その考え方と指導と評価-』 北尾倫彦編集 図書文化 1995年
『社会科教育 3月号 新社会科考える授業をつくる言語力』 明治図書 2009年